

パラレルワールドTOKIO

改めて先日の講座ことを思い返して、そのパラレルワールド感に身震いした。スクリーンに映し出される東京の一角の一部屋。小さなカメラに吸い込まれていく私とベルリンの今。時折とぎれとぎれになるデジタルの応答にすぎるように耳を澄ます。どのように伝わっているのか掴みきれない私の声と意識と無意識。2018年の今日、世界は確かに小さくなった、はずなのだけど、あの日私と東京は果てしなく遠い気がした。異国の地で暮らしているゆえに普段はあたかも自分自身のように扱っている東京の手触りが急に掴めなくなって、その空白のせいでかえって自分の中にあった、思っていたよりも大きかったその存在感に否応なく気づかされる。そういえばそうだった。テレビ電話はいつだって、埋められない物理的距離を顕在化させるのだ。接続を切ってしばらくの間、私は東京の存在すら疑っていた。

儀式のつくりかた ーテーマA

私は、迷信と呼ばれる類のものをことごとく信じている。信じている、というか、事実としてあるよね、という感じ。なので、つくる時もそれが前提になっている。ただ、それらを迷信と呼ぶ人たちがいるのを忘れないことは非常に大切だし、あるいはひとつの現象に対して異なるアプローチで説明することが可能だというのも大前提だと思っている。例) 宗教的アプローチ、科学的アプローチなどなど。これは余談だが、私に言わせればちかごろ科学が宗教化している。科学的に立証されているからといってそれ以外の捉え方を全て否定するのは、原理主義的なやり方だ。

さて、演劇やダンスの起こりは古今東西、神への奉納であった。そしてそこには必ず、始めた人(たち)がいる。彼らにそれを指示したのは、あるいは神や精霊や妖怪かもしれないが、その指示を受け取って様式を確立させたのは人(たち)であったはずだ。儀式は彼らというフィルターを通してこの世に出現した。作品やつくる過程で「見えないもの」を扱うとき、現代でもそれにならったらいいのだと思う。

『存在の耐えられない暗黒』において、私たちは故・土方巽がしたかったこと、彼の靈魂が今したいであろうことを探ろうとした。途中、受けてきた批判・批評なども含めて、ノイズの中に見え隠れする土方の意図をどうにか汲み取ろうとしてきた。土方のお墓参りに行ったとき、カファイが私のそれとは異なる作法でお供えやお参りをするのを正そうとしてはとした。誰かが大切な人と繋がろうとするとき、他人がそのやり方に口を出す筋合いはない。結局その場にいたそれぞれがそれぞれのやり方でご挨拶をした。それでいいのだ。もちろん作品として提示されたものに対して批評やコメントをする権利は誰もが持っている。でも、これでいいのだ、これじゃいかん、の最終判断をするのはつくる側でないとはいけない。私はつくる側として、受け取る側に忖度したくない。しがちだけど、全力でそれを食い止めたい。判断基準は、そちらにどう見えるかではなく、こちらが大真面目に取り組んでいるかどうかだ。でないとつくる意味がない、と思う。私はいまだに、芸術は世界を変えられるツールだとけっこう本気で信じている。

完成版の作品はまさに、各種技法と作法、その他の要素が寄せ集められ入り乱れたものになった。テクノロジー、ドキュメンタリー、舞踏、コンテンポラリーダンス、演技、通訳、ノイズ、奇声、降霊、日本、シンガポール、台湾、ドイツ、ルーマニア、ネパール、華僑、あの世、この世、バーチャル・リアリティ。私が舞台上で儀式めいたことをやっているとしたら、それは私たちの経験とリサーチと感覚に基づく寄せ集めのフィクションだ。そして世界中に現存するありとあらゆる神聖な儀式も、きっとそうして始まったのだと思う。

パラレルワールドTOKIO (続編) -テーマB

11月8日、飛行機に乗る。翌日9日にはパラレルワールド東京に到着する。その後はしばらく東京に住む。しばらく、というのが数ヶ月なのか数年なのかはわからない。そのしばらく、の間も私は、他の都市や国を訪れたり、ベルリンと行き来したりするのだろうと思う。そのしばらく、が終わって再び東京を離れるときが来たら、自然とそれがわかる。いつもそうだったから。迎えの車がつきましたよ、と呼び鈴を押されるような感じで。運命とは暫定ルートである。ナビと違うルートや目的地に行きたくなっても大丈夫。色々落ち着いたらまたベルリンで生活するつもりだけれど、そのときになってみたら急に気が変わって全然ちがうところに住むことになるかもしれない。それでも再び東京を、日本を離れることになるだろうという予感はある。世界のどこにも、永遠に絶対に安全な場所なんてないから、どこでも生きて行けるようになりたい、とベルリンに移住を決めたときにそう思った。だからこそ今、東京に戻らなければいけないんだという気がしている。私は一度東京から逃げたのだから、東京を攻略しなければ、どこでも生きていける私にはなれない。というわけでまずは、東京での生活を文句いいながらも全力で面白がりたいと思う。